

センター つみん



子どもの風景 第11回

子ねこを見つけたよ

明(小3)

五月五日の朝に、わたしはきがえようとばあちゃんのへやに行きました。となりの家の方から

「ニャー、ニャー、ニャー。」

というなき声が聞こえてきました。

わたしは、パパとママに

「ねこの声がするよ。」

と言いました。そして、パパとママがとなりの家の森から子ねこを見つけてきました。かわいいうす茶色のとらねこでした。「たすかかってよかったね。」うれしい気持ちと、「なんで小さいいのちを捨てるのか。」かなしい気持ちになりました。わたしは、子ねこを大じにしたいです。

目次 2023年9月

子どもの風景(第11回)	1
特集 子どもの生きづらさと学校づくり	
震災からの学校づくり	渡辺 孝之 2
特別なニーズに応じた教育実践	五十嵐淑子 7
子どもの生きづらさと学校の困難の中で、 今、学校・教育をどう創造していくか	本田 伊克 12
わたしの出会った先生 41	阿部菜知子 17
子どもと学校	
「笑顔」で人と人がつながる	齋藤あずさ 18
授業への招待①	
「有機授業」と「たいひ」	小野寺勝徳 20
読者の声(はがき・メールより)	21
おすすめ映画	鈴木 吉雄 22
読書のすすめ(第13回)	矢部智江子 22
相談センター報告(第32回)	室賀 徹 23
ひと言	数見 隆生 24
子どもの風景 作品について	川村 美和 24
センターの動き・編集後記	24

特集

子どもの生きづらさと学校づくり

全国で不登校25万人、子どもの自殺500人を超え、子どもたちの生きづらさが広がっています。今、その子どもたちに寄りそった学校づくりが求められています。学校づくりに何が必要なのか、みなさんと共に考えます。

震災からの学校づくり

―子どもたちを主体に安心して通える学校づくり

渡辺孝之

子どもの権利条約の前文に、次のような一節がある。

「極めて困難な条件の下で生活している児童が世界のすべての国に存在すること、また、このような児童が特別の配慮を必要としていることを認め、(中略)次のとおり協定した。」

東日本大震災は、突如、圧倒的な生きづらさを多くの子どもたちに強いた。住居も学校も家族も友だちも食べ物もおもちゃも勉強も失った子どもたち。震災から12年、私は当時の浜市小から統合後の鳴瀬桜華小まで子どもたちと「学校の創造」に取り組んできた。

見えてきた学校像について述べたい。

1 「学校」を取り戻す

震災翌日、浜市小教職員は東松島高校に住民と一緒に避難し、保健室を借りて「職員室」とし、避難所運営と児童の安否確認(全校児童167名は奇跡的に全員無事だった)、指導にあたってきた。

東日本大震災から20日が過ぎた2011年4月1日、私は、小野小学校校舎3階の東端の「音楽室」にいた。そこが私たち浜市小

学校の職員室となり、新たな学校づくりを始めることになった。部屋には数本の長机とパイプ椅子、机上に電話機が1台。それがスタートだった。

4月2日、被災校舎から子どもたちのランドセルや学用品を保護者と搬出した。また、2階にあった机・椅子は自衛隊に活動を依頼して運んだ。米軍の「トモダチ作戦」で米兵のみなさんと丸2日、瓦礫と格闘し、泥にまみれた校舎をきれいにした。

子どもたちのケアも並行して行った。子どもたち全員の無事は確認したものの、学区のほぼ全域が浸水し、学区内外の大小の避難所や自宅の2階で生活していた。職員は毎日、被災校舎の物品搬出チームと児童の巡回指導チームに分かれて行動した。

その間にも、教職員の人事異動が強行され、先頭に立って渉外を担ってきた校長と職員室再建に尽力していた事務職員が異動した。教員も異動対象となった。子どもたちは家も地域も学校も先生までも奪われた。

4月21日、新年度がスタートした。学区外の間借り校のため、93%の子どもがスクールバスを利用した。デンマーク王国が資金援助をしてくれた。スクールバスは最大6コース運行した。子ども一人ひとりがどこに住んでるかを確認し、バス停を設け、運行計画書を作成した。学校に通うことだけでも一苦労だった。

小野小学校の3階1フロア、6教室と音楽室・準備室・資料室を「間借り」させていただいた。音楽室は職員室に、準備室が校長室、資料室が特別支援教室になった。

子どもたちも校舎を「お借りしている」と強く意識していた。子どもたちは学校前でバスを降り、校舎の3階まで上がってくる。「お借り」している校庭・校舎を通る間、息を止めるようにそっと歩く。3階に着いた時に子どもたちがフーツと息をするのを感じる。そうした子どもたちに対し、「あいさつが元氣ない」と言われる。その度にかつての姿を知っている本校職員は「あいさつのできないう子ではない。この環境が子どもたちをおとなしくさせているのだ」

と言いたい思いがこみあげた。

子どもたちは、自分ではどうしようもないモヤモヤを抱えながら過ごしていた。一人の子どもが教室でそのモヤモヤを爆発させると同時多発的に教室でいさかかが起こる。四六時中、目の離せない状態が続いた。

「大震災という未曾有の出来事に直面した時に、様々な反応を示すことは正常なことである」と言われ、時間の経過とともに子どもたちは落ち着きを見せるようにはなった。けれども、完全に収まるわけではない。問題は次々と起きた。落ち着きがない、集中力が持続しない、攻撃性が強くなる、年齢に相応しくなく親に甘える、大人の気を引きたがるなど様々な行為が子どもたちの間に見られた。発達障害を疑わせるような子どもも少なくない。

その中に4年生のA児がいた。A児は引き渡しで下校し、自宅から母と姉妹の4人で避難する途中に津波に飲み込まれ、救助されたが、妹は助からなかった。震災後、悲嘆にくれる母は後悔にさいなまれる日々を送った。そんな母を家で見てA児は母を責めた。それがいつそう母を苦しめた。

A児が立ち直ったのは震災から3年が過ぎた運動会。6年生で赤組の応援団長になったA児は全校の先頭に立って声を張り上げた。赤組が優勝し表彰台でのA児の晴れやかな顔。子どもたちの顔を見るのがつらいと言って学校から遠ざかっていたA児の母親もこの日はやはり学校に来ていた。「今日はA児のための運動会だったね」と声をかけると、母親も力強くうなずいた。止まっていた歯車がようやく動き出したようだ。心のケアと言って特別なことに取り組むこともあるが、当たり前前にことに精一杯取り組むことの大切さを感じた。子どもは安心できる環境の中で自らの力を発揮し、周囲に認められながら自信をもち育っていくのだ。

当時、県教委の施策は「学力向上」と「志教育」が突出していた。2012年(平成24年)に県教委が出した文書には「震災とその後

を大切にし、更に意欲や目標をもって学習に取り組んでいけるよう志教育についても一層推進を図っていく」とある。被災校の子どもたちには大きな格差があり、狭い仮設住宅で勉強もままならず、心の中の不安のやり場もなく悶々とする子どもたちが存在した。「夢」や「志」を持って、くじけず頑張れ、どうにもなるものではなかった。私たちもどのように子どもたちを育てたらよいか模索が続いた。かつての浜市小学校の教育目標「心豊かでたくましく底力のある子ども」「めざす学校像「花と緑と歌声にあふれた学校」がいつも脳裏にあった。しかし、校舎もなく家庭環境も整わない実態では同じことができる訳がないことに当時は思い至らなかった。

校長の掲げた教育方針も同様で、「しつけ3原則」(①あいさつ、②返事、③後始末)を子どもたちに徹底させようと提起した。外形の行動を整えれば心も整うであろうというものだ。それは子どもの内面を見る私たちの目を閉ざしてしまうものに他ならなかった。今思えば、未曾有の大災害の渦中にある子どもにとっては意味をなさないものだった。

2 学校統合からの再出発

間借りの解消のためには新校舎建設が急務だが、津波が来た場所に再建するわけにはいかず、学校統廃合が決定した。安全な高台に校舎を建設するための土地取得と造成には数年を要する。子どもたちに不自由な間借り生活を何年も続けさせる訳にはいかなかった。選択の余地がない苦渋に満ちたものだった。「震災がなければできなかった」統廃合と言われた。

統合後も苦労の連続だった。新しい学校のスタイルが確立できない。当時児童数は、小野小約130名、浜市小約140名、母体となる小野小の子どもたちより浜市小の子が多い。生活のルールが確立しない。転入職員は「この学校は、何をどうしたらよいか誰に聞いてもわからない」と嘆く。通常その学校のルールは子どもたちに聞けばわかるのだが、本校は誰に聞いても確かな答えが返っ

て来ない。だからここは被災校なのだが……。また、子どもたちは統合により友だちが増えたことを喜ぶ一方で、新しい他者の受け入れと物理的スペースの狭小で様々なトラブルを起こした。震災の混乱に、統合の混乱が重なり、職員は疲弊し、病休者がでて職員は転出者が相次いだ。

新しく畑を作り低学年が野菜を育てているのを見て、上級生が「おれたちではできなかったな」とつぶやいた。震災後の中で様々な支援を受けてきたが、それでもできなかったことが子どもたちの中にはすき間としてぽっかりと穴が開いている。その穴を埋めることが私たちの仕事なのだ。

3 励まし、認め、成長する学校に

子どもたちの心のケアについて手探りの状況が続いてきたが、5年目に転機を迎えた。新しく転勤してきた校長が子どもたちの示す違和感に疑問を持ち、解明を試みた。様々な研修会に行つてはその内容を私たちに伝えた。その中で、「子どもたちは常に脅威に反応しなければならぬ状況に置かれると、脳の発達で脅威に反応する部分が他の重要な部分、大脳辺縁系と大脳よりも発達する。その結果、社会的・情緒的・認知機能をなう脳の高次の領域が十分発達しないという危険がある。発達途上の子どもたちが愛情のやり取り



や遊びを探索することの代わりに、生存することだけに注意を集中しなければならぬとしたら、彼らの健康や発育に長期的な破壊的な結果を引き起こされる」という精神科医ブルース・D・ペリーの説を紹介した。まさに震災後の子どもたちの姿に重なると思った。また、直接津波の濁流に流されたという恐怖だけでなく、避難所生活も大きなダメージを子どもにも与える。親が死んでしまったのではないかという不安を抱き停電の暗い避難所で待ち続けた子は、その後「愛着障害」のような姿を見せていた。震災でPTSDやトラウマを抱えた子どもたちは、その後何度もフラッシュバックを起こすなど、特にレジリエンスが弱い子どもたちに深刻なダメージを与えていることに気づいた。グリーフ（喪失体験）においても、肉親を失った子どもとペットやおもちゃを失った子どもも、その子にとっての大切なものを失ったということにおいて変わりはない。子どもたちの生きづらさに次々気付かされた。

「学力テスト」の点数と震災で半壊以上被害を受けた世帯の子どもたちに相関関係があることも明らかになった。実際、授業中、集力を欠く子どもが多い。震災後の避難所・仮設住宅の生活で落ち着いて勉強できない、そういう子が教室で集まって落ち着かず、これでは学力が向上することはない。

そうした子どもたちに、「外発的な動機付け」や「愛のむち」は全く効果がないということになり、次のような指導方針を確定した。

- ① 安心・安全で愛情あふれる共感的な環境の提供
- ② 自己存在感・自己肯定感・自己効力感・自尊心を醸成する
- ③ 自己決定し自らの力で成長する

「学力テストの点数をあげる」ような外発的動機付けは求められなくなり、子どもが伸びるように職員が考える姿勢が大切にされた。私たちは子どもたちが自分で考え、学び合う授業づくりに取り組んだ。子どもたちは運動会や学芸会、児童会活動などの行事の中で主体性を発揮し始めた。大切なことは、教職員が子どもたちを励まし、認め、成長しているということを語り続けることだった。

当時、校長は、算数の通分・約分の簡単なプリントを作成し、6年生に宿題として課すとりくみを始めた。長年中学校に勤務した経験から、中学校でのつまづきを少しでも減らしたいという思いがあった。校長が宿題を集めて採点して返す。子どもがなぜできないかを分析し、よくわからない子どもがいると校長室に招いて教える。教室でやると間違える子どもが校長室でやると正しく解ける。集中できる環境が子どもたちに必要だと感じたという。震災の中で子どもたちにはそれが保障されていなかった。私たちの仕事は子どもたちが安心して学べる環境を整えることだと痛感した。

4 「夢がふくらむ楽しい学校」

2021年、新しい校舎が完成・移転した。学校のスローガンが「夢がふくらむ楽しい学校」だ。新しい校舎は、どこにもないような開放的な設計で、3階まで通しの中央階段、各階に2つずつあるホール、広い廊下、校舎と一体化する広い講堂、校庭、すべての教室の黒板は電子化され、冷暖房が完備されている。この校舎で学ぶことで夢をふくらませてほしい、という願いが込められている。

同時にコロナ禍で多くの教育活動が制限され、ともすれば夢がしぼむことも多かった。私たちはできるだけ子どもたちの願いに添えることを考えた。5年生で予定していた花山宿泊学習は断念したが、代わりに「通い」で奥松島宮戸での野外活動を丸2日間実施した。子どもたちが柿、リンゴ、ユズ、ビワなど「実のなる木」を40本以上植えた新たな果樹園も完成した。名前を公募したところ「鳴瀬の宝石箱『ゆめファーム』」と名付けられた。学校で行う一つひとつの活動に子どもたちの夢が込められているように子どもたちはとらえるようになっていた。

心に残るのが、放送委員会が企画した昼の放送のプログラム「カラオケ大会」。月曜から金曜まで毎日やっても応募者が絶えることがなく連日続く。歌う子どもは大満足で、聞いていて思わずクスッと笑みがこぼれる。他愛のない活動だが、子どもが考え出した活動

を認めて実現させる教職員がいることを子どもがわかっているからこそ実現できている。子どもたちにとつての安心の環境が確立されてきた証だと思った。

5 子ども期を保障する学校づくり

親は子どもを育てるのに必死だ。震災時には、生活の再建、就労の確保が重なりそれは尋常なものではなかった。親は子どもを愛している。しかし、その愛を形にする余裕がない、考える暇がない。その時に私たち教師ができることは親が頑張っていることを認め、安心させることぐらいしかないのではないかと。もうすでに十分頑張っているのだから。

「夢がふくらむ学校」でも、学校に足が向かない子、始業時刻に間に合わない子はいらる。私のいる理科室から、朝、始業後、とぼとぼ登校する子がよく見える。道路に向かって「おはようございます！」と声をかけ手を振る。子どもたちも手を振り返してくれる。玄関で迎えて「よく来たな、朝ご飯は食べたか」と声をかける。大概食べたという返事。本当は食べていないのかもしれない。学校に到着するまでに様々な思いが交錯し、それを乗り越えてたどり着いた子たち。そうした子どもたちを認めて受け止めることが、私たちの仕事の出発点だとようやく思うようになった。それは、生きづらさの中で頑張ってきたたくさんのお親と子に教えられたことだ。

そうした子どもたちへの共感を土台にせず、いきなり評価や指導から私たちは仕事を始めてはいないだろうか。子どもたちが夢をふくらませようとするのを、教師の「評価」が子どもの夢を妨げてはいないだろうか。評価と指導の一体化というが、指導がなければ「できない」ことを子どもは突き付けられるだけとなる。子どもたちは日常的に教師からできる・できないの評価を受ける。学力テストをしなくても子どもの学力はわかり、何が課題かもつかめる。むしろテストをして「できないこと」を自他ともに認識するだけになって

はいないか。学習場面だけでなく、日常生活でも「評価」を受ける。学校では大きな声で、相手より先に、「あいさつ」を指導する。大きな声であいさつができれば社会に出たときに通用するだろう。しかし、名前も知らない人に大きな声であいさつをする人はいない。子どもたちはいつでも元気にあいさつできるわけでもない。あいさつが大事だと思っただけこちらが心を込めてあいさつをすればいい。そのうち小さな声でも返事が返ってきて、心が通じる一歩になれば十分ではないか。

国連子どもの権利委員会は、子どもたちに子ども期を十分に過ごさせること、過度な競争を改めること、を日本政府に勧告している。震災直後、校舎もない、学用品もない、家もない、そんな状況の中で、夢をふくらませることなどできる訳はなかった。子どもたちの自己肯定感・自己有用感を高めて自尊感情を育てなければ、夢はふくらまない。夢を膨らませたりしほませたり、存分に味わうのが子ども期そのものだ。学校は子どもたち一人ひとりの内面に寄り添い、安心・安全な環境で褒めて、認めて、励まし続ける場所、12年をかけてそんな学校像にたどり着いた。

(東松島・鳴瀬校華小)



特別なニーズに応じた教育実践

「特別支援学級での取り組み」

五十嵐 淑子

現在、どの学校にも特別支援学級が設置されているが、何をどのように教えているのかその教育については、担任した教員以外には、あまりよく知られていない。

広く理解していただくために、特別支援学級の教育システムについて例を挙げながら説明し、そのあとで、特別支援学級で育つ子どもたちの事例を紹介して、具体的イメージを持つことができるようにしていきたい。

様々な特性や個性を持つ子どもたちが共に学ぶ特別支援学級の教育について知ることが、今、学校で増えている発達障害や不登校など集団に馴染めず、個別の支援を必要とする子どもたちをも含めた学校のあり方を探る助けになると考える。

1 特別支援学級とは？

(1) 特別支援学級に在籍する児童と児童数について

【児童について】

①学力が、該当学年より2年以上遅れている（仙台市の就学支援のためやす）。②専門機関や医療機関に診断を受けている（障害名、病名、それに準ずる診断）。③教育委員会の就学支援委員会で特別支援学級適切な判断が出ている。

【児童数について】

1学級8名まで担任が1人。ただし、6名以上の学級には、講師や支援員を配置（仙台市）。

※実際の学校生活では、5名であっても1人の担任で指導するのは大変。障害や特性が個々に違い、多岐にわたっている。学年が多学年にわたったり、通常学級との交流学习への支援が困難。特別支援学校適切な判断を受けていても、保護者の希望で入級する児童が増えている（小学校）。

(2) 特別支援学級の教育課程

「通常学級の教育課程に準ずる」のが基本だが、個々のニーズに応

じた教育をしなければならぬので、実態に応じて特別の教育課程（特別支援学校）を取り入れることができる。通常学級の教科等のほかに、次の教科等、指導形態がある。

〔特別支援学級で設定する特別支援教育の教科等〕

「自立活動」一人一人の障害による学習上の困難または生活上の困難を改善・克服するための活動。

〔教科等を合わせた指導形態〕

「日常生活の指導」日々の生活に必要な活動の力を高める指導。「生活単元学習」各教科等の内容を広く合わせ、生活に即した実際的・総合的な学習。「作業学習（中学校以上）」将来の職業生活や社会自立に向けて基盤となる資質・能力を身に付ける学習。

2 特別支援学級での教育実践より

(1) 学級環境づくり

見やすい、分かりやすい、使いやすい、片付けやすいように教室を構造化することで、児童が生活しやすい環境をつくと同時に自発的な行動を引き出す。そのために、①教室内を目的別に仕切る（個別学習ブース、小集団活動スペース、休憩スペース、運動スペース等）。②個人のスペース（座席、ロッカー、物掛け）と共有のスペース（教材置き場、遊具置き場、絵本置き場等）を区別する。③黒板まわりに授業に関係のないものを置かない、貼らないように整備する。④教室内の掲示板には、最小限必要なものだけを場所を固定化して貼る。

(2) 学級集団づくり

特別支援学級（小集団）での生活や学習活動を通して、人との関わり方を学びながら、共に学び育ち合う仲間としての意識を育む。特別支援学級での経験を基盤にして、交流学級（大集団）への適応力の向上を図る。

※実際の学校生活では：①1学級の児童数は、最大8名。1学級

が2、3名の場合や2学級以上合同となると10名以上になる場合もある。②年齢や障害の程度・特性が様々な児童で、集団をつくる困難さがある。③途中転入や入級によって、年度の途中でも学級集団の作り直しが必要になることがある。

(3) 授業づくり(例)

〔算数〕〔国語〕

前半に個別の課題を行い、後半に数人で数的な遊びや活動をする。同じ単元を、全員で学習する場合は個別目標を設定し、活動や授業展開・教材を工夫したり、チームティーチングを取り入れて指導する。

〔生活単元学習〕

行事単元、季節単元、栽培活動単元、地域単元など、学級の状況に応じて自由に設定できる。単元のねらい、個別の目標、学習計画等を独自に設定しなければならない。

〔特別支援学級独自の総合的な学習の時間〕

地域についての学習：「○○町大好き！」

自分づくり、職業：「お仕事をしよう！」

〔自立活動〕

手足の協応動作、手指の微細運動、コミュニケーション（発音、言葉の使い方など）、対人関係、情緒の安定 など

(4) 通常学級との交流学習

〔日常の交流学習〕

個人によって交流する教科、学習内容は違う（能力、得意・不得意、興味・関心、……）。交流学級担任の特別支援教育への理解度、児童への対応の仕方が影響する。

〔交流イベント行事〕

特別支援学級に交流学級児童を招いて楽しませる。または、一緒に楽しむ。例として、生活単元学習で「夏まつり」「秋まつり」な

どを計画し、遊び、ゲームなどを自分たちで手作りして、交流学級児童・担任を招待する。

3 子どもたちの姿から（実践事例）

事例1：様々な子どもたちと共に

のびのびと学ばせたい！（小1）

Aさんの入学に際して母が不安に思っていることは、体がとても小さく、排泄や食事など身の回りのことに手伝いや見守りがまだ必要であることであった。保護者は、身辺処理について個別の支援を受けながらも、幼稚園のときのように多くの友達と関わりながら楽しく過ごさせたい、みんなと学習させたいという希望を持ち、近隣の特別支援学級を何校か見学、相談して本校入学を決めた。

入学前に本人も本校特別支援学級を見学し、朝の運動や朝の会に参加するという体験を行った。母から離れず初め緊張した表情で見えていたが、体を動かすことが好きなAさんは、運動に誘うと生き生きとした表情になり、子どもたちのまねをして体操したり走ったり、あつという間に馴染んで嬉しそうに活動していた。一方で、母からなかなか離れないことから、慣れないこと、新たに体験することに對しての不安感や恐怖感が強いように感じられた。

教室では、座席に座ってみんなと一緒に朝の会に参加したり、絵や字をかいたりした。トイレ、手洗い場なども、Aさん自身が実際に使ってみたりすることで、学校生活のイメージを持つことができた。私たち教員にとってもAさんの様子を直接知ることができ、Aさんに合った教育課程の編成や教科書を用意することができ、手洗い場の踏み台設置や水道のレバーの取り換えなどの環境整備を行うこともできた。

Aさんについては、身辺処理への個別的な支援が必要なため、「日常生活の指導」という指導形態を取り入れ、毎日繰り返し指導を積み重ねて、身の回りのことを自分ですることができるようにした。

特別支援学級に馴染むにしたがって、仲間と行う朝の運動（「自

立活動」）や朝の会（「日常生活の指導」）、野菜の栽培（「生活単元学習」）を楽しみにするようになり、毎日笑顔で張り切って活動している。

国語、算数については、入学直後は、交流学級で多くの友達と一緒に学習していたが、学習が次々と進んで理解が追い付かなくなり、自分から特別支援学級で勉強したいと言いつ出した。現在、体育、音楽、図画工作の時間に交流学級に行つて、みんなと一緒に活動している。慣れ親しんでいる特別支援学級では、自分らしさを十分に発揮して仲間と共に伸び伸びと活動し、交流学級では、周りにいるたくさんの友達の様子を見ながら、学習活動に一生懸命ついでいこうと頑張る姿が見られている。両方の場で、Aさんに合ったバランスで学ぶことで、力を付けてほしいと願っている。

事例2：通常学級で困っていたBさん（小4）

明るく活発で運動能力も高く、興味を持ったものにすぐに飛びついて、目を輝かせて楽しむBさん。友達にも自分から大きな声で元氣よく話し掛けている。じつと着席して取り組む学習は苦手で、体を動かすことが多い生活科、体育、図工に意欲的に取り組んでいた。1年生のときは、特に問題となる行動もなく、友達と活発に活動し、楽しく学校生活を送っていたBさん。2年生になったころから、授業中、友達に話し掛けたり、いらいらして大声を出したり、教室内を歩き回ったりするようになった。担任に注意されるとますます行動がエスカレートし、突発的に乱暴な言動をする様子も見られるようになった。更に注意されると教室を飛び出して、校内を徘徊するという状況であった。

教頭や教務が時々支援に入ったり、飛び出したときには、校長が個別に対応したりしたが、落ち着くのはその場限りで、行動は変わらなかった。授業の様子を何度か見に行つてみると、いらいらしたり落ち着かなくなるのは、じつと着席して話を聞いたり課題に向かわなければならぬ国語・算数の時間であることが分かった。でき

る範囲で別室での個別学習を実施したところ、短時間ではあるが、集中して課題に向かい、理解することができた。しかし、教室で皆と一緒に授業を受けているときの行動は、ほとんど変わらなかった。

次年度、男性担任になったことで、我慢して教室にいたことが多くなつたが、担任がいないところで乱暴な行動をするなどがあり、問題の改善には至らなかった。前年度の継続で、別室や特別支援学級の空き教室を使つて個別学習を実施したが、毎日決まった時間に決まった場所で行うというわけにもいかず、計算力が少し向上したのみで、効果は限定的であった。

学校での様子、医師の診断、個別検査の結果をもとに市の就学支援委員会で話し合われた結果、特別支援学級での指導が適切との判断を受け、新年度より本校特別支援学級に入級した。

特別支援学級在籍児童が全員で7名という少人数の中でも、周りの子どもたちが気になつて国語や算数の個別課題に向かうことが難しく、別室での個別指導となつた。集中できる環境、分からないところはすぐに教えてもらえる状況になつたことで短時間ではあるが、学習に前向きに取り組むようになり、理解がぐんと進んだ。

学級全体として、1時間の流れを固定する、課題プリントの枚数を決めるなどしたことにより、その時間のやることに見通しを持つことができるようになり、自発的に学習活動に取り組む姿が少しずつ見られるようになった。また、「課題を終えたら、トランポリンができる。」のように、頑張つたあとに本人の好きな活動をする時間を設定したことで、ストレスをため込まずにメリハリをつけて生活することもできるようになってきた。

また、入級直後から担任が一对一で話を聞いたり学習指導する時間を確保してきたことで、担任に甘えたり気持ち言葉を伝えたりするようになり、乱暴な言動が減ってきている。何よりも表情が変わつた。こちらをにらみつける鋭い目つきがほとんど見られなくなり、柔らかな表情で学校生活を送っている。

交流学习については、入学当初から通常学級で学んできたので、

同学年の子どもたちは、Bさんの性格や特性をよく理解しており、そのままの状況を受け入れ、グループ活動では、うまく仲間に入れてくれている。

しかし、学年が進むにつれて、国語や算数以外の教科でも理解が難しくなり、本人の希望も受けて、特別支援学級での学習の時間を増やしている。特別支援学級独自の「生活単元学習」に毎回参加するようになり、野菜の栽培、買い物学習など生活に根差した体験的な学習を仲間と共に生き生きと行い、社会生活に必要な力や人と関わる力を伸ばしている。

事例3；自信を持って自分らしく(小6)

入学時から特別支援学級に在籍しながら、通常学級で多くの時間を過ごし、同級生と一緒に学んだり活動したりしてきたCさん。そのため、集団生活への適応能力は高く、教師の指示に従い、周りの友達の様子に合わせて行動することができている。必要に応じて個別的な支援をすることで、国語、算数以外は、通常学級と一緒に学習することができた。

毎日、元気に登校し、楽しげに学校生活を送っている一方で、学年が上がるにつれて、苦手なことやできそうにないことは、励ましても「どうせできないし、やっても下手」、「できなくても別にいい」と避けようとして投げやりになつたりする態度が強くなつた。

そこで苦手なことは、まず特別支援学級で取り組み、



失敗してもうまくいかなくてもいいから、やってみることを続けた。一方で、得意なこと、好きなことに取り組む時間を設定した。

特別支援学級の中では、時間がかかっても自分のペースで行えること、周りの目を気にすることもないことから、苦手なことにもコツコツと取り組むようになった。少しでもできるようになって「見て！見て！」と担任を呼び、うれしそうにやって見せてくれ、一緒に喜ぶという場面が繰り返されることが続いた。

好きなことをやる時間には、科学実験を希望し、自分で内容を決め、自分で必要なものを準備し、不安なことは担任に相談しながら進めた。自分で決めることで生き生きと取り組み、たとえうまくいなくても投げ出すことなく、「どうしてなんだろう」と再チャレンジする姿を励ましながら見守った。

今年の5月、運動会での徒競走でのこと。前の子がゴールしてもまだ、あと10メートルを走り続けているCさん。腿を上げて一歩一歩力強く地面を蹴って前に進むCさんの走る姿の美しさに1位の子以上の視線と拍手が送られた。練習のときよりは、離されずにゴールしたCさん。満足したよい表情だった。Cさんは、足が少し不自由なために高学年になつてからは、ハンディをもらって10メートル近く前からスタートしていた。本番のこの日、なんと皆と同じスタートラインから走り出していたのだということを知って驚いた。本人に聞くと「なんか前に行きそびれたんだよねえ。」とこにこしながら言っていたが、大差になるかもしれないという不安な気持ちよりも、「練習してきたし、今日はやれそう」という自信と前向きな気持ちの方が勝り、自然と皆と同じスタートラインに立ったのだと思う。

自分で選び自分で取り組む姿勢が身に付き、前よりできるようになったことを自分自身で認め、更に前に進もうとする姿も見られるようになった。このエピソードだけでなく、他の苦手なことや国語、算数の学習への取り組みに変化が見られると母親も語ってとても喜んでいいる。ぐんぐん力が付いてきて、成長著しい今日この頃である。

4 まとめと今後の課題

(1) 特別支援学級の教育について

特別支援学級では、担任が児童個々の実態をしつかりととらえて、その子らしく伸び伸びと学んで成長できるように教育課程を編成して実践する。つまり、「何を、どのように、どこで学ぶか」を一人ひとりの児童について、児童同士の関係性も考慮しながら、担任が細かく決めて実施しなければならない。

特別支援学級の教育課程を実践するに際して気を付けたいことは、

- ① 子どもと話し合いを持つなどして、できるだけ子どもの意志を尊重したり、自己選択をさせたりする。
- ② 年度の途中でも、子どもの状況によっては、教育課程の実施の仕方を見直し、柔軟に変更する。
- ③ 交流学習については、交流学級の子どもの状況、交流学級担任の理解と経験、特別支援学級の在籍児童数によって制限されることもある。

特別支援学級では、個に応じた教育課程の編成や実施ができるが、現在の基準のように児童8名に対して教員1名の配置では、実際のところ、したくてもできないことが多い。十分な人材、場所、時間の確保は必須であり、同時に教職員、児童や保護者の特別支援教育に対する理解が深まるような働き掛けもしていかなければならない。

(2) 通常学級の特別支援教育について

通常学級で、つまり大きな集団の中で生きづらさを抱える子どもたちが増えている。理由と思われることや状況・状態は、個々に様々である。誰がどこで支援するのか、どの学校でも対応に苦慮している。学校によって対応は、ばらばらであり、その年だけ、そのときだけの対応になってしまうことも少なくない。今後は、どの子

も安心して学校生活を送ることができるよう、特別なニーズに応じて個別的な対応ができる場所と人を学校ごとに配置されるべきである。

(3) 特別支援教育全般について

特別な支援を必要とする児童の成長、変化には、2年、3年……6年と時間がかかることが多い。子どもの姿や保護者の思いを受けながら、個別の支援計画、個別の指導計画を活用して、短期目標、長期目標を立て、今、どのような支援が適切なのか複数の支援者で考えながら、サポートする必要がある。担任や支援者が替わっても、

確実に引継ぎができるようにするためにも、特別支援教育コーディネーターの役割も重要である。

私自身、特別支援学級担任、特別支援教育コーディネーターとして学校生活を送りながら、特別支援学級、通常学級どちらに在籍しているかに関わらず、教職員、保護者、周りの子どもたちがお互いに温かい視線を向け、それぞれの子どものおよさや個性を大事にしながら、共に成長できる学校づくりをすることが最も大切であると感じる日々である。

(仙台・小学校)

子どもの生きづらさと学校の困難の中で、 今、学校・教育をどう創造していくか

本田 伊克

1. 教育政策の意思決定プロセスへの国家関与の強化

教育に関わる政策が決定されるプロセスは、2006年の教育基本法「改正」によって、決定的に変わった。今日の教育政策の動向を捉える上で、この点を認識しておく必要がある。

改正された教育基本法第17条に、教育振興基本計画について規定された。これにより、教育政策の各領域を包括する総合的な計画（教育振興基本計画）が閣議によって決定されることになった。教育振興基本計画については、2008～2012年度が第1期、2013～2017年度が第2期、2018～2022年度が第3

期で、2022年度末に2023～2027年度の第4期教育振興基本計画が今年（2023年）6月に閣議決定された。

こうして、教育政策に関する意思決定プロセスが首相官邸のより直接的な影響下に置かれ、もはや文部科学省と中央教育審議会を中心軸として意思決定がなされているとは言い難い状況になっている。

内閣府に設置され、教育も含めた各領域の政策を梓づける「骨太の方針」を作成する経済財政諮問会議、首相が座長を務める「総合科学技術・イノベーション会議」によって教育の基本的枠組みが定められるようになっていく。また、デジタル技術を最大限に活用して既存の組織やシステムを抜本的に変革する「デジタルトランスフォーメーション」を学校教育にも拡大する「教育DX構想」を主導する経済産業省と、オンライン教育のプラットフォームとコンテンツを提供する民間事業者による「EdTech」の推進、総務省の賛同も得て推進される「データ駆動型社会」構想など、教育の構想についてはより多くの省庁や民間事業者が関与するようになっていく。

現在、第12期中央教育審議会（以下、「中教審」）初等中等教育分科会で、「義務教育の在り方」が検討されている。2023年3月には、中教審初等中等教育分科会、個別最適な学びと協働的な学び部会、義務教育の在り方ワーキンググループ（WG）の連名で「義務教育の在り方ワーキンググループ論点整理」（以下、「論点整理」）が出されている。次期学習指導要領改訂の方向性にも関わるこの「論点整理」は単に「中教審」ではなく、中教審の複数の分科会、部会、WGの連名で出されている。特に、ここに名前を連ねている部会とWGには、他省庁や民間事業者、NPO法人等の意向も反映されていると思われる。教育政策の意思決定プロセスに文部科学省以外の人々の関与が強まっていることを読み取ることができるのではないか。

2. 「義務教育の在り方」をめぐる

政策的議論と方向性を見据えて

こうした動きを視野に入れて考えると、国の政策は果たしてどのような教育像を構想し、実現していくこうとするのか。それは、現在の子どもの生きづらさと学校の困難に対してどのような影響をもたらさうのか。

まず、上に述べた「論点整理」を批判的に検討してみたい。論点整理は、2023年に閣議決定された第4期教育振興基本計画を踏まえ、今後の学校教育の在り方を大きく方向づけようとするものである。

論点整理は、「日本型学校教育」の「強み」と「弱み」を分析し、ICTの一層の整備と教育成果のエビデンス化、すべての子どもに「ウェルビーイングを実現できる場所」としての学校と社会の在り方を検討するとしている。

先述の第4期教育振興基本計画では、第3期教育振興基本計画の「成果」として、初等中等教育については、「国際的に高い学力水準の維持」、「GIGAスクール構想」の推進、「教職員定数改善」を挙げている。そもそもこれらの点を成果と称してよいのか、また、「国際的に高い学力水準」とはどのような力がどのように「維持」されているのか、教職員定数が「改善」されたという認識が妥当なのかについて反省がなされなければならないはずだ。

だが、こうした点は基本的に改善されたという認識のもとに、第4期の基本的な方針として「グローバル化する社会の持続的な発展に向けて学び続ける人材の育成」、「誰一人取り残さず、全ての人の可能性を引き出す共生社会の実現に向けた教育の推進」、「地域や家庭で共に学び支えあう社会の実現に向けた教育の推進」を掲げている。

論点整理は、第4期教育振興基本計画に示された方向性を踏まえつつ、今後検討していく課題として、次の4点を挙げている。「(1)

子どもたちに必要な資質・能力と学校が果たす役割」、「(2) 全ての子どもたちの可能性を引き出す学びの実現」、「(3) 学びにおけるオンラインの活用(※ここでいうオンラインの活用は、対面でのクラウド上の教材活用等は含まず、専ら遠隔によるものをいう)」、「(4) 学校教育になじめないでいる子どもに対する学びの保障」である。以下、「子どもの生きづらさと学校の創造」という今号通信の課題意識に立ちながら、批判的に検討してみよう。

カリキュラムを拘束するが教育条件は整備しない

(1) では、子どもたちが社会に出ていく際に必要なコンテンツをリストアップし、漏れなく準備するという発想に基づいてカリキュラムを編成することはもはや不可能であり、一般性・汎用性をもつ能力(「資質・能力」)を身につけさせ、不確かさの増大する未来社会に対応できる力を培う方向性が一層強調されている。

現行の学習指導要領については、教科・領域等横断的に「資質・能力」を培う方向性と、学校種・学年ごとに指導事項を細かく定めていることとの矛盾が、学校教育のカリキュラムの過密化(「オーバードロード」を生んでいる状態を改善することも求められている(奈須、2021)。

だが、論点整理にある「子どもたちに必要な資質・能力」は、今を生き、学び、新しい社会を担っていく子どもたち自身の学びの願いや思いを何よりも大切にする発想に立って考えられているものだろうか。

そもそも、1950年代後半以降の日本の教育課程政策は、学習指導要領と教科書検定によって国が教育内容を統制しておきながら、それをどこまで身につけるかは子どもの自己責任とする方向性を現在まで変えていない(窪島、1996)。

テクノロジーと人間が共生していくことでもたらされる幸福と、何が起こるかわからない予測不可能がないまぜになった未来像が強調されるなか、幼児期には「小さな小学生」を、小学校では「小

な中学生」を目指せというように、新しい社会が求めるとされる人間像と能力の獲得を、子どもたちの自己責任のもとに急ぎ立てる動きがさらに推し進められていくのではないか。大人世代にも見通せない現在の社会を生き、未来の社会を形成していく子どもの発達課題や要求への応答性を軽視する教育、現在の社会において支配的な位置を占める人々が構想する未来社会像を突き付けて子どもたちを急ぎ立てる教育が推進されていくことが懸念される。

「教育DX」化による公教育の侵食

(3) については、わざわざ、「※ここでいうオンラインの活用は、対面でのクラウド上の教材活用等は含まず、専ら遠隔によるものをいう」という註までついている。

ここには、2021年1月の中教審答申「『令和の日本型学校教育の構築を目指して』が打ち出した『個別最適な学び』と『協働的な学び』についての考え方が引き継がれている。この答申は、『到達度主義』の名の下に、学習指導要領、検定教科書の内容、評価をデジタルコード化し、子どもたちそれぞれの「ログ」の学習履歴によって学習到達度を確認する仕組みを構想するものである。到達度主義の名の下に、コード化された教育課程の国による統制がいつそう強まり、子どもたちは当てがわれた学習経路をそれぞれの進捗で進むことだけが許されることにもなる。ちなみに、教科書にはQRコードも記載され、その先には教科書検定の対象にならない「デジタル教材」が配置されているわけだが、学習指導要領と教科書検定による強力な教育内容統制とデジタル教材との関係はどう考えたらよいのか? いずれにせよ、子どもたちが個別分断化され、予め設定・配列された内容をそれぞれの進捗で学ばされるという意味で「個別最適」なのである。

「協働的な学び」については、2021年答申では主に、子どもがオンラインを活用して空間的・時間的な制約を超えて情報を得たり、話し合いをしたりすることが想定されていた。論点整理では、「義

務教育として共通に学ぶべき内容を保障しつつ、子ども同士が一人一人の良さを互いに認め合う中で、それぞれの特性に応じて資質・能力を伸ばす」とある。確かに、学級づくり、学校行事の運営や授業において、「他者と関わりながら、自他双方のニーズに応えるために、どう調整し、合意形成を図ればよいか」、「学年や学力、属性などが異なる者同士が、学校の中でつながり、交流する」ことについて言及はある。

だが、論点整理が示す課題と論点を通して読むと、大きな流れはICTを活用して子ども一人ひとりの学習目標・進度を個別に管理することにあると読める。教育のICT化、さらに、学校教育の内容と制度を共にテクノロジーによって根本的に革新し効率化しようとする「教育DX（デジタルフォーメーション）化の動きが教育予算削減と公的施設の解体的再編の動きとも結びつきながら進行すれば、子どもたちが互いの存在に応答し合い、互いの考えや意見に学び合う学校教育の「溶解」が進み、すべての子どもたちの学びや成長機会を保障する公教育が痩せ細ることが懸念される（児美川2022：34頁）。

また、(2)や(4)について、教育条件についての国・地方教育行政による整備がないまま、教育のDX化による効率主義のもとに事が進めばどうなるか。

たとえば、「一律に登校し、一律の内容と進度で学ばなければいけない学校」を何とかしようという動きが、教育産業の主導するICT化の一層の



推進、オンライン学習の機会とコンテンツの流入、そして、企業NPOによる学校教育の公共性に関わる部分の解体・再編につながっていく可能性もありえる。教師と子どもたちが応答しあい、教師の願いと子どもの願いと要求との「対話」が起こる学びの場としての学校、コンピューターに対する人間の有能さではなく生きていく人間一人ひとりのかけがえのなさが尊重される学校が失われていくことも懸念される。

3. 学校と教育をどのように創造していくか

私たちは、今の厳しい社会状況、教育の状況のなかで、子どもたちが生き、育ち、学ぶ学校と教育をどのように展望し、創造していくことができるだろうか。

学校を含め、より広く教育について考えるとき、私たちの子育て・教育の基盤が揺らぎ、崩れつつあることにも目を向ける必要があるだろう。

日本社会を歓喜と熱狂の渦に巻き込んだ「バブル経済」と、企業による終身雇用と福利厚生と引き換えの「モーレツ社員」的な働き方、企業が要請する学力・学歴（学校歴）獲得競争に家族と子どもが巻き込まれてきた。このような状況が進行していくなかで、学校では何をこそ学ぶのか。社会に出て一人前になることは、また、一人前の人間として育つとはどのようなことなのか。人が一人前に育っていく過程を導いたり、促したりする営みをどれだけ豊かなものができるか。そうしたことが考えられないまま、子育てと教育において大切なものが失われていったのではないか。

さらに、バブル経済が崩壊し、企業も、官庁も、非正規雇用を前提にした労務管理を導入し、もともと脆弱だった日本の社会保障の制度の弱点も露わになっている。

国が示す教育振興基本計画や義務教育の在り方の論点整理は、このような状況に正面から向き合い、子育て・教育の営みの大切さを認識したものとはおよそ言い難い。

しかし、私たち自身も、子育てと教育の営み、さらには、生活や労働における意思決定において、どれだけ民主主義的な原理に基づいて思考し、行動できているかを問い直してみる必要もあるのではないか。

おかしいなと思うことを、お互いに話し合ったり、力を合わせて変えていくような経験がどれくらいあるだろうか。考え方や感じ方が違う人のこと、自分とは異なる人生を歩み、異なる見方や考え方をしている人のことを尊重し、理解し合いながら、大きな目標を目指すために手を携えていくことがどれくらいできているだろうか。

また、子どもたちを見守り、関わっている私たち自身が、保護者たち、教師たちが、それぞれの幸福や生活の充実を実現し、社会がよりよくなっていくことを展望できているか。個人的には、この国に生きる人々の生活をないがしろにするような政治を行っている人たちからわざわざ「ウエルビーイング」などのカタカナ語を持ち出されて、「幸せを実現してください」などと言われたくもない。

だが、私たち自身が幸せなのか、幸せに生きるとはどのようなことで、どういうふうにすれば互いの幸せな生き方を認め合い、実際にそのように生きていけるかを展望できなければならない、子どもとの間にも、その発達と学習の権利を保障しながら、かれらの成長を見守り、支え、喜び合う関係を築くことはできないのではないか。

現在の教育課程政策の基調は、学力・学歴序列化をベースにした「コンテンツ（指導事項）」の細かな管理・統制から、「資質・能力（コンピテンシー）」育成の名の下に、子どもの人格的なものまでも競わせ、教育と社会における「成功」を子どもと家族の自己責任に帰する方向性へとシフトしている。

こうした動きのなかで、授業の中での「文化」との出会いが軽視されているのではないか。文化について論じることが、教育内容との関わりに限定しても、一筋縄でいく問題ではないため筆者も今後の課題としておきたいが、ここでは以下の点についてだけ述べておく。

いま読者と共有したい文化のイメージは、点数化され、序列化を生み出すことに関わるような教科内容のことではない。私たち人間が、時代時代の困難の中で苦闘し、積み上げてきたものの見方や考え方、対処の仕方などを追体験し、それを学ぶ子どもたち自身による受けとめや解釈を通じて新たに作り変えられていくようなものにとりあえずイメージしている。

教師が子どもの学ぶ力を信じ、教材として子どもたちに差し出す文化を媒介にした学び合いを通じて、子どもたちが他者と世界と新たに出会い、他者や世界との関係で自己を問い直し、生きる展望を見出す瞬間は、どこの教室にもあるだろう。そうした営みが、生きること、学ぶことから疎外されている子どもを文化と出合わせ、自己の育ちを支えていくことになるのではないか。

東日本大震災の後も、新型コロナウイルスがもたらす未知の脅威に直面しても、私たちは、子どもたちの不安、思い、生きることと学ぶことへの要求に応答し、子どもたちの力を信じながら、一緒に道を切り拓いているのではないか。改めてそのことを思い起こし、子どもの育ちに伴走する教育の営みが紡ぎだされる学校を創造していきたい。

《引用・参考文献》

・窪島務（1996）『現代学校と人格発達―教育の危機か教育学の危機か』地歴社

・児美川孝一郎（2023）「惨事便乗型教育改変と公教育のゆくえ」、『季刊人間と教育』113巻

・中西新太郎・谷口聡・世取山洋介（福祉国家構想研究会編）（2023）『教育DXは何をもたらすか―「個別最適化」社会のゆくえ』大月書店

・奈須正裕（2021）『少ない時数で豊かに学ぶ』授業のつくり方―脱「カリキュラム・オーバーロード」への処方箋』ぎょうせい

（宮城教育大学）

センターつうしんを読む際にはこの「私の出会った先生」のコーナーは読み流して終わっていました。なぜなら、ステキな先生に影響されて教員を目指すなんてロマンは、超現実主義者の私の人生にはないものなのです。

とはいえ、今回思い浮かんだのは、いつも道徳の「正直」がテーマの時に子どもたちに話す鉄板エピソードです。

小学校3年生の私は、夏休みの宿題は、スタートダッシュのちしばらく忘れ、最後まで後回しにするタイプ。その年もご多分に

漏れず、前日夜になって大量に残る夏休み帳と大物の作文が残っており、非常な焦燥感を感じておりました。するとそれを見かねた2つ上の姉が、手伝ってあげようかと言い出しました。そう、私の、50を過ぎてでも末っ子気質「誰かが何とかしてくれる」精神はこうして育まれてきたのです。それでも、自分でやらなくちゃという一応の生真面目さとせめぎあった当時の私は、口述筆記という手を思いついたのでした。字体も似たようなものだし、まあいけるでしょ、と。この根拠のない樂觀性も、当時から。相当年季が入っていますね。かくして、自分はひたすら夏休み帳に向かいな

がら、原稿用紙に向かう姉に向かって「はい、次はこう書いて。字似せてよ」を繰り返し、なんとか宿題を間に合わせたのでした。

さて、それを受け取った当時の私の担任は、松田千代松先生。サザエさんの波平さんに似た昔風で真面目なおじいちゃん先生は、果たして提出した作文を見て、私を傍に呼び聞いたのでした。「この作文、お前の字じゃなさそうだけど」教員生活も四半世紀やった今の私なら分

つめ合って（睨み合って）いたような気がします。そして先生は「そうか。」と引いてくれました。道徳の時間にこの話をする度に、最近はずとあのときの先生の心中はどんなだったんだろうと思うようになりました。嘘だと分かっていたながら、私をじっと見つめてそれ以上は聞かなかつた先生の思いは、今となつては想像するしかありません。もしかしたら、強情っぱりに手を焼いていて、攻めあぐねたのかも知れません。あるいはこれ以上関わるのが面倒だったのかもしれない。それとも一度泳がせて、本人の良心が痛むことを期待する高度テク？先生として、今なら私はどうするか、そんなことを考えるようになりました。

わたしの出会った先生 41

「これは本当にお前が書いたのか？」

阿部 菜知子



かります。漢字のノートは表紙を見なくても一目で誰の分かるものです。そりゃ気づきますね。

「これは本当にお前が書いたのか？」真っすぐに私の目を見て聞く千代松先生を見つめながら、当時の私の頭の中では「口述したのは私だから、私が考えた」私が書いた」と謎の理論がグルグル。「はい。」真っすぐ目を見返してそう答えたのでした。私の記憶では、しばらくそうして見

もう他にはどんな先生だったか大して思い出せないのに、何十年たつてもこの場面だけはありと思ひ出します。「嘘をついて正直に言えなかつた」ことが心の澱として残るエピソードは、この千代松先生なしでは語れないものなのです。そして、小学校のときの先生でフルネームで覚えているのもこの先生だけなのでした。

（仙台市教職員組合）



「笑顔」で人と人がつながる

齋藤 あずさ



3月まで一クラス約40人の学級を担任していた私は、休み時間や放課後は宿題の丸付けや生徒指導の日々でした。教材研究をする時間はもちろん、目の前にいる子どもとゆつくり過ごすことができないことが苦しくもありました。マスクをしていたこともあってか、笑顔が少なかったのではないかと思います。

4月からは全校17名の小規模の学校へ異動になりました。40人学級から急に全校でも17人。どんな生活が始まるのかわくわくのスタートでした。

4月から現在までの子どもたちのかわいいエピソードや勤務校のエピソードをいくつか紹介したいと思います。

リビングに集合!

私は1年生男の子2名の担任としてスタート。2人の入学式を全校でお祝いしました。ワックスでかっこよく決まった髪の毛に、スーツを着た2人の姿はとてもかわいらしく、双子の我が子を見守る母親の気持ちになった気分でした。

入学式の翌日からいよいよ1年生の小学校生活が始まりました。一言でいうと朝は6年生5名がお世話をしてくれます。しかし、1年生と関わるのは、6年生だけではないのです。10分の休み時間に「何してたの?」と、2年生から5年生もぞくぞくと教室に遊びに来ます。『たてわり活動』と名付ける活動がなくても、当たり前に関わるのです。

1年生の教室やみんなが集まる図書室は一言で言うと『リビング』でしょうか。家族のように毎日お兄さん、お姉さんと一緒に遊ぶ姿を見ると、安心して学校に来ることができているのは、全校の子どもたちのおかげだと感じます。

いっこらっしやい! おかえい!

4月のある日。異動して初めての出張がありました。子どもたちの邪魔にならないようにと、昇降口を出てからそくつと駐車場に向かいました。すると、私に気付いた1・2年生がベランダに出て、

「行ってらっしゃい!」

と、手を振って見送ってくれました。しかし、声は上からも聞こえてきます。なんと、1階から聞こえた「行ってらっしゃい!」の声を聞いて、2階で勉強している3・6年生もベランダに出てお見送りをしてくれていたのです。これまで何度も出張に行っていますが、こんなに盛大にお見送りをされたことはありません。子どもたちの人を大切に思う気持ちにグッときた瞬間でした。

それからというものの、1年生は誰かが校外学習や出張に行くたびにベランダに出てお見送りやお迎えをするのが恒例になっています。

うれしい裏切り・・・

6月の音楽朝会は全校で『にじ』を歌いま

した。音楽主任が担任している4年生は、音楽朝会のために『にじ』の前奏を練習しており、皆が歌う前に演奏してくれました。朝会の終わりに、音楽主任の先生から、

「他の学年の皆さんも、ぜひ前奏を弾いてみてくださいくださいね！」

と、お話がありました。私は、

（1年生はまだ鍵盤ハーモニカの学習をしていないし、難しいだろうな……。）

と思い、1年生には「やってみようか！」と声は掛けずにいました。業間休み、職員室で仕事をしていると、1階の教室から『にじ』の前奏を練習している音が聞こえてきました。（さすが2年生！ ちよつとずつマスターしているな。）と、教室へ覗きに行く

と……。弾いていたのは1年生！ 自由帳には「れくしみれ しみれ……」と、4年生に書いてもらった楽譜がありました。業間休みに手取り足取り教えてもらったので、8割マスターしていました。急遽3時間目を音楽にし、猛特訓!! まだ鍵盤ハーモニカの「ド」がどこかも分らない1年生が、3時間目の終わりに、『にじ』の前奏をマスター（必殺！

両手弾きです）しました。大喜びし、「みんなに聞かせたい！」

と、向かった先は図書室。実は、図書事務の先生は、小1サポーターとして4月から5月末までお世話になっていました。早速披露すると、大きな拍手をもらいました。次に向かった先は、校長室。アポなしでお邪魔し、堂々

とお披露目。その後、4年生や5年生、6年生……と、皆に披露し大満足の2人でした。

『にじ』をきっかけに、鍵盤ハーモニカの学習が大好きになった2人は、音楽の授業になるといつも鍵盤ハーモニカを用意して目をキラキラさせています。（ごめん、今日は使わないんだけどなあ……。という日も多々あります。）「できないんじゃないかな。」を裏切る1年生は面白い！ それから全校のスポーツテストの準備でマットを2人で10枚運ぶなど、「やってみる？」と聞くと、「やる！」なんでも挑戦するたくましい1年生が誕生しました。



読み聞かせスタイル誕生

5月19日。

「今日は開校記念朝会だから、体育館に演台を用意しなきゃ。」

私は、1年生の担任兼教務主任をしているため、朝会の日には朝に準備をしています。開校記念ということで、いつもよりピリッとした雰囲気です。演台は隅の方に避けられ、話になると、演台は隅の方に避けられ、

「集合〜！」

と、声が掛かりました。子どもたちは読み聞かせのように校長先生の周りに集まり、話を聞き始めます。ここから、『読み聞かせスタイル朝会』の誕生！ 校長先生は、用意した画用紙を見せ、クイズを交えながら子どもたちに話を始めます。

その日以降、演台の

代わりに読み聞かせ用の椅子を用意するようになりました。「今日はどんな話をするんだろう？」子どもたちがワクワクしながら校長先生と対話をしています。ホッと落ち着く朝会の時間です。



愛情を込めて

4月からの学校生活を振り返ると、直接「人

と人がつながる」ことがいかに大切かを感じました。オンラインなどの便利な機能もたくさんありますが、一緒に遊び、言葉を交わし、うれしい時に言いたくなる……。そんな関係を教室や学校で大事にしていかなければいけないのだと、改めて実感した半年となりました。少しずつマスクのない生活に戻ってきました。日々心掛けていることは『笑顔』です。1年生なので、泣きながら登校することもあります。しかし、どんな子どもの姿も笑顔で受け止めていると、『学校は楽しい』と、少しずつ子どもも笑顔になってきます。日々、小さなことでも喜びや感動、元気を与えてくれる子どもたちに感謝の気持ちを忘れず、愛情を込めて過ごしていきたいと思えます。

（仙台・小学校）



「有機授業」と「たいひ」 ～「牛乳」の授業から～

小野寺 勝 徳

1 「食生活を見直そう」牛乳の授業

栄養教諭の教育実習生が来て、「骨とカルシウム」を題材にした研究授業をしました。そのお礼も兼ねて、「牛乳」を題材にした授業を行いました。

(1) 牛乳をたくさん出すのは？

放牧されている乳牛(A)と、牛舎につながれている牛(B)の2枚の写真を比べて、どっちの牛がたくさん牛乳を出すのかを予想しました。

(2) 牛乳の味の違いは？好きなのはどっち？

2つの牛乳の味を比べて、味の違いと、どちらの牛乳が好きなのか確かめました。

(3) たくさん牛乳を出すのは？

自分でもし牛だったら、自然の中で放牧された方がいいと思います。しかし、とうもろこしなどを中心とした「配合飼料」をたくさん食べている牛の方が、出産後305日間で出す牛乳の量が多いのです。ところが、そのような飼いやしているところ、10～15年繁殖能力がある乳牛が、繁殖障害などの病気になることも多く、5～6年で「肉」にされてしまうようです。

(4) 牛乳本来の味に近いのは？

Aの青い箱の牛乳は、65℃で30分殺菌した「低温殺菌」の牛乳です。岩手の「厚子牛乳」です。Bの赤い箱の牛乳は、130℃で2秒殺菌した「高温殺菌」の牛乳です。宮城の「上原」の牛乳です。実は、Bの箱に入っている牛乳と同じ産地の物で「低温殺菌」の牛乳も販売していましたが、岩出山の工場の設備更新時に採算がとれないと

牛乳のちがい



B…赤パック



A…青パック

- 高温殺菌
- 130℃ 2秒

- 滅菌
- 香り=こげのにおい
- 本来の牛乳とのちがい
- タンパク質の熱変成あり
- 208円 (税別)

明治おいしい牛乳

- 低温殺菌
- 65℃ 30分
- バスチャライズ
- 有害菌の殺菌
- 有害菌は生きている
- 本来の牛乳に近い
- タンパク質の熱変成なし
- 238円 (税別)

228円 (税別)

いう理由で、「低温殺菌」の牛乳の販売はなくなっ
てしまいました。私たちが「牛乳の香り」だと思っ
ているのは、実は高温で殺菌する際の「こげ」の
匂いだとも言われています。学校給食で飲んでい
る高温殺菌の牛乳の方が好まれ、本来の牛乳に近
い方があまり好まれない現状があります。

2 味覚の「コントロール」

飲み比べをしてみると、小さい時に食べていた物
が、「味覚」の形成に大きな影響をもたらしている
ことがわかります。「12歳までに食べた物で、その
人の味覚の好みが決まる。だから、12歳までにハン
バーガーを食べてもらえば、その後、生まれた川に
サケが帰ってくるように、20歳を過ぎてからまた、
食べ始める(食の回帰)」というような内容のこと
を、ハンバーガー店経営会社の社長がインタビュー

で語っていました。その成果でしょうか。ドライブスルーがあるハンバーガー店の近くを通ると、休日には渋滞していることも見かけます。食の好みも「学習の成果」だとすると、子どもたちの現在の1回1回の食事が「生きた体験学習」になっているのかも知れません。「ほく、ホヤ、好きになったよ。去年から好きになったんだ。うちの家族、全員、ホヤ、好きだよ」と、給食のときに話していた子がいました。12歳までに、本物のおいしいものを食べる体験をたくさんさせたいです。

3 「皮むき名人になろう」

包丁を使う体験については、それぞれの家庭によって違いがあるのは当然だと思います。そこで、仙台白百合女子大の冨家幸子先生と研究室の学生の協力をいただき、「りんごの皮むき」の授業を行いました。まず最初に、「皮むき名人になろう」の動画を観ました。白百合女子大の学生2名が卒業研究で作成したビデオです。YouTubeでも公開されているので、参考にしてください。 <https://youtu.be/vXlCpNpW7M>

4 「体験学習」と「授業」

(1) 「日常の世界」から「科学の世界」へ

茨城の小学校教諭の鈴木正氣氏は、社会科の授業実践として、「擬似的生産労働」を通じて、「日常の世界」から「科学の世界」へ「わたり」、認識が変わることが大切だと主張されていました。それは、社会科だけでなく多くの教科に当てはまると思います。私は、体験前の認識と体験後の認識の変化の見直しを持ち、そのためにどのような「体験活動」が必要なのかを考えることを大切に

してきました。

(2) 「有機農業」から「有機授業」へ

さらに、授業方法として私は「有機授業」と名付けました。「有機農業」には、「たいひ」が必要です。「有機授業」にも「たいひ」が必要です。前者は、「堆肥」で、後者は「対比」です。比べることで違いが分かり、その意味と意義が分かるのです。

「いつでも、どこでも、誰でもできる授業」は大切ですが、それだけになったら「自分」でなくともいいことになり、その仕事は「オペレーター」に置き換えられてしまいます。「自分にしかできない」授業を創ることも、授業の「自給率」と「自

給力」を上げることになります。食料だけでなく、授業づくりの「自給力」と「持久力」は、教師自身の学力の大切な構成要素の一つではないかと思っています。

(参考文献)

『食育再発見』（小金澤孝昭 復刻版 初出は雑誌『食生活』フットワーク出版）

『食の戦略』（鈴木宜弘 文春新書）

『アニマルウエルフェアとは何か』（枝廣淳子 岩波ブックレット）

『支えあう子どもたち』（鈴木正氣 新日本出版）

（大崎・小学校）

読者の声

宮澤孝子さんの教育時評「学校給食をめぐる諸問題～子どもの権利保障の観点から～」、この記事によって学校給食の無償化を取り巻く様々な問題の多様性と本質について深く学ぶことができたように思う。私の住む町でも、地域の願いとして「無償化を」という声が上がりがつつある。この夏～秋に向けて実現をと話し合っている。

小野寺浩之さんの「短歌のちから」も興味深い内容でした。ありがとうございます。（鈴木純子さん）

「子どもと遊び」を興味深く読ませていただきました。私は中学校勤務ですが、中学校あるあるで、「中学生が（道端に、公園に）集まっている。（なんか良くないから）何とかしてほしい。」という連絡（苦情）が入ることがあります。ただ居るだけの中学生、何か悪さをしているわけでもない状況に、自分が不快だから何とかしてほしいという大人の要求。「変だな～。おかしい。」と感じる学校。どこの学校でもあることではないでしょうか。

子どもたちは学習しますから、公園でたまったりしません。遊ぶこともしません。家に帰ってスマホやゲームをします。外出しても、スタバやマックなどで飲食しながらスマホ片手に談笑します。大人も子どももいない公園は、何のために、誰のためにあるのでしょうか。せわしなく、能率、効率ばかりを追求してしまっている大人や社会が、もう少し時間と予算をかけることが大切だと思います（千坂朋広さん）



おすすめ映画

鈴木 吉雄



理想と現実の狭間で『夢みる校長先生』

子どもファーストな公立学校の作り方

2023年

学校では、私たち教員が子どもと「何をするか」が大事なはずなのに、「してはならない」、「すべき」などの一方的・画一的な指示が多くさんある。しかもその指示は子どもでも分かるような、当たり前のもので含まれている。教育研究者の鈴木大裕氏は、このような学校現場の状況を次のように指摘している。(大月書店『グレスコ』2023年7月号から抜粋・一部改)

『飲酒運転をするな。テストや個人情報が入ったデータを持ち出さな。長時間残業するな。現金を職員室の机の中に入れておきな。体罰や暴言、パワハラやセクハラで生徒の人格を傷つけるな。児童生徒との身体接触は一切するな。親との飲み会は当然禁止。子どもは男女関係なく必ず「さん」付けで呼ばなくてはならない。いかに自分たちが世間から信用されていないか。」「これを読んでやる気を出す教員がいるか?」

管理すること、締め付けることで、人は育つのだろうか? 教員を信用しない社会において、果たして人を信用する子どもが育つのだろうか?」



全く同感である。しかし、希望はある。『夢見る校長先生』に出てくる6つの学校(宿題をなくした東京都の桜岡中学校など)は、いずれも私が勤めるのと同じ公立学校だ。共通なのは、「信頼」という言葉に集約されるであろう。校長が教職員・子どもを信頼し、教職員が子ども・校長を信頼し、子どもが教職員を信頼する。学校に集うすべての人たちが、学校に「居場所」を得ている。そうした学校をつくることは私たちにできる。そしてそれをつくる

力の源は、子どもの権利条約と日本国憲法が力を与えていると映画は語っている。映画は、微かではあるが、自分の人生の「理想と現実」を繋ぎ、一筋の希望の光を照らしてくれる。

(角田・小学校)



読書のすすめ (第13回) 矢部智江子

『じじつは じじつ、ほんとうのことだよ』 —ちいさな かなしいじじつのおはなし—

ジョナ・ウィンター ぶん ピート・オズワルド え 金平茂紀 やく
イマジネーション・プラス社 2022年



先日、金平さんの講演を聞きました。『報道特集』で見る金平さんは、きりっとして、いかにもできるジャーナリストですが、講演は、わりと柔らかな口調で穏やかに話していました。その金平さんがおっしゃっていたのは、現在はもう既に「新たな戦前」になっているということでした。それは、安倍元首相の銃撃事件以降、加速しているそうです。その意味で、2022年は、歴史の分岐点になるのではないかと話されました。

そんな金平さんが翻訳したのが、この絵本です。「ちいさなかなしいじじつ」くんが、だれにも信じてもらえず、偉そうな人達に、地下深くに閉じ込められてしまいます。しかし、そこには、たくさんの仲間の「じじつ」達がいました。そして、何とか外に出ようと考え始めます。外は外で、偉そうな人々を恐れない勇敢な人達が立ち上がります。そして……。

「新たな戦前」になっていると言われる今の世の中で、私たちが何をしたらいいのか、とても示唆に富んだ絵本です。とても平易な言葉で書かれてはいますが、内容はとても深い絵本です。

大人の方が読んでもいいですが、小学校高学年くらいからなら読めるのではないのでしょうか。道徳の授業などで取り上げて、ここに出てくる「ちいさなかなしいじじつ」とは何なのか、子どもたちと一緒に考え合うと、とてもいい授業になると思います。その意味で、先生方にぜひ読んでほしい1冊です。

(元小学校教員)

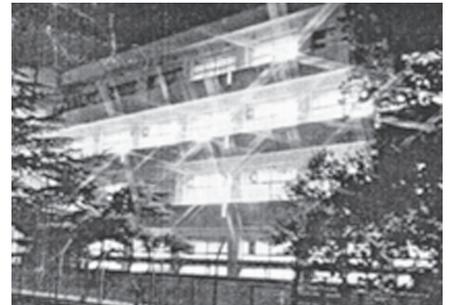
おすすめ
BOOK



徹 賀 室 教育相談センター相談員 みやぎ

教員時代、夜間定時制高校に21年ほど勤務した経験の中からいくつか取り上げたいと思います。

I 給食「おばんです」、「おはようございます」、「今日、おかわりいい?」。授業開始前の夕方5時頃に始まります。日中の仕事を終えた生徒の健康維持が主な目的です。季節料理や郷土料理



の知識、栄養知識を伝えてくれた調理職員の方々の創意工夫にはいつも頭が下がります。教職員、生徒が食堂に会し、暖かい食事を食べながら職場のこゝろ、家族のこと、愚痴、趣味など語り合い、人間関係を深めるのには最適な場でした。全校生徒100人足らずの小さな学校なので、誰が来て誰が休んでいるか、全生徒の様子が一目瞭然でわかるのが食堂です。県から夜食費補助があり、個人負担は二百数十円でした。家庭の経済事情から栄養バランスを夜間給食のみに頼る生徒もいます。近年、緊縮財政の影響で生徒の就労日数に制限が設けられたため、補助が受けられない生徒がぼつぼつと出てきてしまいました。給食を希望せずに廊下でコンビニパンを頼る姿がとても残念です。

生徒はクラスの中では全く違和感がなく茶髪で目立つことはできません。女子生徒は授業前のお化粧に余念がありません。担任「今日、少し化粧濃くないか?」。生徒曰く「制服なしはマジきつい」。毎日、今日何着ていくかを考えなくてはならないからです。「みんな同じ制服で安心」が甘えであることに気がつくのです。中学校時代、「不登校」だった生徒が半数を超えていました。しかし、気がわかるのか次第に仲間を見つけ、大方の生徒は登校が続くようになっていきました。就労する生徒の影響で日中の仕事を始める生徒も出てきます。就労経験は生徒を一気に大人へと成長させます。放課後、教員への声かけは「お疲れ様でした」に変わっていきます。戦後の集団就職世代で高校教育を受けていない方が何人か籍していました。祖父母と孫ほどの年齢差です。若い生徒にとっては人生の先輩としてことあるたびに頼りとされる存在でした。

II ホームルーム多くて一クラス15人程度でした。制服はありません。職場の制服や建築現場の人夫姿の生徒もいます。茶髪が当たり前の世の中。茶髪

III 授業、仕事で疲れている生徒はいびきをかいて寝ていることがあります。「睡眠不足で明日仕事で事故ると大変だから寝かせておこうね」が、周りの爆笑を誘い起こされてしまいます。授業はともゆつくりです。小・中学校の基礎ができていない(学んでいない)生徒が大半なので先々と進めることはできません。シラバスや年間指導計画はかえって障害でしかありません。「初めてこんな点数とった」。少しずつ理解していく中で自信を持ち始める生徒の様子にこちらが励まされた思いです。

「みやぎ教育相談センター」のご案内

TEL 022-272-4152

相談受付内容

進路・不登校・ひきこもり・いじめ・家庭生活・教職員の悩みなど。

土・日曜と祝日をのぞき10時から17時

ただし夏休みなど長期休業期間は、相談センターも一定期間、休業日があります。

秘密は厳守します。相談は無料です。

学校ってなんだ？いま、真剣に問い直さねば！

数見 隆生（センター代表運営委員）

いまほど学齢期の子どもたちが生きづらくなっている時代はない。「学校は楽しい場だ」という原則を忘れてしまったようだ」と遠山啓が主張したのは1976年である（『競争原理を超えて』 太郎次郎社刊）。遠山は学校が子どもと教師にとって楽しい場でなくなりつつある最大の要因は、子どもを点数で競争させ、序列をつけ分断が広がった状況にあると指摘した。同時に、氏はこうした状況下でクレーバーな子（頭の回転が速く利口な子）は一部に育っても、ワイズな子（皆で生きがいある社会を築いていこうとするような賢い子）は育っていない、とも指摘した。

あれから半世紀、いままさにこの指摘の課題は頂点に達していると思われるのではない。データが公にされている一昨年度（21年度）1年間で不登校の小中学生が約5万人増加、70年代から徐々に増え続け21年度合計で25万人近くにもなっている。学校が国の経済成長戦略に組み込まれ、学校がその「人材」養成の下請け機関化しつつある。学校関係者は「学校が人間を育てる場である」とこの自覚を鮮明にすべき時がきている。

子どもの風景「作品について」……川村 美和（宮城作文の会）

子どもの個性を大切に 書くことを通して子どもの思いを知る

今年度、一緒に生活をしている3年生の明さん。とても小柄で可愛らしく、おしゃべりが大好きです。いつも一緒にたくさんお話をしています。

もうすぐゴールデンウィークが明けようとしているある日、明さんに素敵な出会いがありました。それは、森に捨てられた子猫との出会いです。明さんは、その子猫を「まぐろ」と名付け、飼うことにしたそうです。兄弟のいない明さんは、まぐろを実の妹のようにとても大事にしています。おやつを食べるときも外で遊ぶときもまぐろと一緒にです。また、明さんがうれしいとき、かなしいとき、いつでもまぐろが側にいてくれます。

普段の子どもの会話、教室での見取りだけでは知ることのできない子どもの気持ちを知ることができているのが作文の魅力だと感じています。これから書くことを通して子どもの思いを知り、一人ひとりを深く理解することに努めていきたいと思っています。書いてつながる魅力を日々感じています。

センターの動き

〈7月〉

- 1日 シンポジウム「子どもの生きづらさと学校の困難」31名参加
- 8日 みやぎ教育のつどい第2回実行委
- 14日（金）第7回事務局会議
- 15日（土）午前：『教育7月号』を読む会 午後：研究部会
- 22日～23日 宮教組『第44回明日の授業』講座（松島・新富亭）
- 24日 ゼミナールSirube『人間とそ

〈8月〉

- 5日 第1回こくご講座『授業わくわく』（25名参加）
- 午前：『世界一美しいぼくの村』授業ビデオ
- 午後：『サーカスのライオン』、『詩』の授業プラン
- 8日～10日 東北民教研・青森浅虫集会
- 21日 道徳と教育「江戸期の洋学」
- 25日 第8回事務局会議
- 29日 第2回こくご講座世話人会

〈9月〉

- 2日 午前：『教育8月号』を読む会 午後：研究部会
- 4日 ゼミナールSirube『人間とそ
- の術』第5回
- 8日 事務局会議※コロナで中止

- 9日 窪島務教育講演会『すべての子どもにたしかかな教育を』（30名参加）
- 23日（土）午前：みやぎ教育のつどい第3回実行委 午後：講演会『ジエンダー平等と教育の役割』（高校共学教育の充実を求める会）エルパーク仙台
- 29日 「つうしん」112号発送、第9回事務局会議
- 30日 『教育9月号』を読む会

編集後記

酷暑の夏、その中で、様々な学習会・講演会が各地で開催された。直接センターが主催した企画は3つ、シンポジウムと国語学習会、教育講演会。その成功のために、チラシ、グループライン、ホームページなどで宣伝をした。しかし、現場の教職員、青年教職員の参加は残念ながら少なかった。何故か？ 現場の教職員、青年教職員に学びの要求がないのか、私たちの課題意識が現場とずれているのか、それとも、学校が多忙過ぎて学びの場に足が向かないのか、気力がわかないのか、休みの日ぐらいは、教育のことを考えたくはないのか、スタンダードやタブレット、デジタル教科書などで、もう学んでも仕方がないと感じているのか。いずれにしても、教員が学ばなくなったら、子どもたちはどうなるのか。私は今も学びたい・学ばなければと思いい書店に足を運んでいる。

（達）

